

かつてテレビドラマでも放映された、「深夜食堂」という作品があります。現在も漫画で連載中の同作品では、新宿・歌舞伎町の繁華街を舞台に物語が展開され、深夜に営業している食堂のメニューは豚汁定食とビール、焼酎のみです。あとは登場人物が個人的に思い入れの深い料理を頼んで、それをマスターができるものなら作るという形で話が進んでいきます。

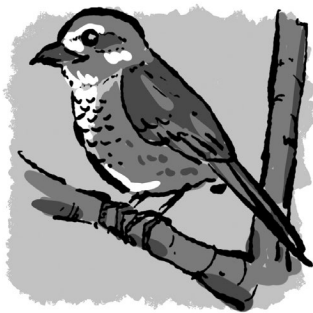
ある人は部活で食べていたお弁当の「赤いタコさんウィンナー」を、ある人は家庭でよく食べていた甘い卵焼きを。思い入れのある食事を各々がとるなかで、同席した他の客も触発されて同じものをいただく。

食を通じて人々が交わり、時に悩みを共有しながら親交を深めることによって、孤独や苦悩を癒やし、それぞれの人生を歩んでいく様が作中で描かれています。

苦楽を共にした親密な間柄を示すことわざに「同じ釜の飯を食う」という言葉があります。同じ場所で、同じものを食することによって、絆が少しずつはぐくまれていく様子を表わしています。

この観点からすると、食は物質的な生命の根源でもありながら、生きる上での安心感や充実感をもたらしてくれるものであるとも言えるでしょう。

会社員のYさんの生家は二世帯住宅で、就職するまでは父方の祖父母と一つ屋根の下で暮らしていました。週末や家族のイベントでは、兄弟も含めて家族六人で食事をとることも少なくありませんでした。



## 食事で気力を養う

母親や祖母、またときに父親と祖父の料理を家族全員で食べる中で、お互いの話をしたり、味や作り方の共有をしたりと、和やかな時間を過ごしました。Yさんが風邪をひいた時には、「滋養強壮にいいから」と、祖母が豚の肝臓で作ったスープを食べさせてくれることもありました。また、お墓参りの時などにお供え物として捧げる料理などは一緒に手作りするなど、食事を通して家族との関わりを深めてきたのです。

就職後は自炊するようになり、幼い頃に作ってもらった料理を自分で作るようになるにつれて、次第に、料理は家族や祖先に対する愛情や敬意を表わすものだという実感をもていったのでした。

家庭をもつてからは、一層その思いが増したYさん。実家の家庭料理を家族にふるまったり、また妻の料理をいただく中で家族団欒の時間をもつことが楽しく、日々の活力につながっています。

生命を維持するだけでなく、楽しい会話や悩みの共有などで毎日の安らぎや活力を得られるのが食事という場です。

こうした日々の物質的、精神的エネルギーを得る食事への感謝の表現として、食前・食後の挨拶はもちろん、喜んで、また楽しくいただくことが挙げられるでしょう。

近年当たり前になりつつある「個食」も楽しみながら、家族や、時に仲間たちと食事を共にする場面も大切にして、悩みは薄め、喜びは倍にして、日々の活力を高めていきたいものです。